Museum | News

群馬の森
美術館ニュース

no・186
2021 10/1

関東南画のゆくえ

江戸と上毛を彩る画人たち

2021年9月18日［土］－11月7日［日］

会期中、一部展示替えをおこないます。
前期：9月18日［土］－10月17日［日］
後期：10月19日［火］－11月 7日［日］

会　　場：展示室1
休 館 日：毎週月曜日（ただし9月20日は開館）、9月21日（火）
開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
主　　催：群馬県立近代美術館
後　　援：朝日新聞前橋総局、産経新聞前橋支局、上毛新聞社、東京新聞前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、群馬テレビ、NHK前橋放送局、FM GUNMA、ラジオ高崎
助　　成：芸術文化振興基金
観 覧 料：一般900（720）円、大高生450（360）円
＊（　）内は20名以上の団体割引料金
＊中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、群馬県民の日（10/28）に観覧される方は無料

18世紀、文人画などの中国絵画に影響を受けておこった南画は、はじめ関西で描かれ、確立された後、各地へと伝播しました。江戸時代後期には、さらに地域ごとに独自の展開を見せながら広く愛好され、近世絵画史を彩る人気画派の一つとなります。

谷文晁（たにぶんちょう）は、18世紀から19世紀にかけての江戸画壇で中心的役割を担った画人で、関西とは異なる展開を見せた関東南画の大成者です。ありとあらゆる画技を学び、独自の画風を作り上げました。様々な文化人たちと交遊するとともに、立原杏所（たちはらきょうしょ）や渡辺崋山（わたなべかざん）、椿椿山（つばきちんざん）、高久靄厓（たかくあいがい）ほか多くの門人を輩出し、その影響は地方へともたらされていきました。

本展では、江戸から広まった関東南画を軸に、文晁ら江戸を中心に活躍した画人たちと、金井烏洲（かないうじゅう）や矢島群芳（やじまぐんぽう）、松本宏洞（まつもとこうどう）ら上毛*の画人たちの作品を紹介します。関東南画を一地域からみつめ、その展開と人々のつながりをたどりながら、作品のもつ多彩な魅力に迫ります。

＊近世における群馬県の地域にほぼ相当する名称には「上野」や「上州」がありますが、別の地域と混同しやすい等理解しづらいため、本展では、金井烏州『無声詩話』や、近代以降に群馬県の文化、美術を語る言説に用いられた「上毛」を用いて緩やかな時代・地域的区分を表しています。

椿椿山《君子長命図》
板橋区立美術館蔵（前期展示）

関連事業

◆記念講演会
「意外に愉快な関東南画―饒舌館長口演す―」
講師：河野元昭氏（静嘉堂文庫美術館館長）
9月25日（土）　午後2時～3時30分
2F講堂　定員70名（要申し込み・無料）

◆ミュージアム・レクチャー
①「北関東における関東南画の広がりと展開」
講師：藤和博氏（元茨城県立歴史館首席研究員）
橋本慎司氏（栃木県立美術館技幹兼学芸課長）
太田佳鈴（当館学芸員）
10月3日［日］　午後1時30分～4時
2F講堂　定員70名（要申し込み・無料）
②「崋山と椿山、地方の書画文化とのかかわり」
講師：増山禎之氏（田原市博物館館長）
10月30日［土］　午後2時～3時30分
2F講堂　定員70名（要申し込み・無料）

◆学芸員による作品解説会
9月20日［月・祝］、10月6日［水］、10月27日［水］、11月3日［水・祝］
各日とも午後2時～3時
2F講堂　定員70名（申し込み不要・要観覧料）

＊新型コロナウイルス感染防止対策を講じ、少人数で距離を保って開催いたします。申し込み方法等、詳しくは当館HP等をご確認いただくか、当館までお問い合わせください。

Topics

改修工事のための長期休館のお知らせ

休館期間：2021年12月16日～2022年3月末（予定）

当館では今年度、空調設備更新工事と特定天井改修工事を予定しています。このため、群馬県展終了後の2021年12月16日から来年3月末まで、全館休館することになりました（工事の進捗状況によっては休館を延長する場合もあります）。長期にわたりご迷惑をおかけしますが、今後も永く施設を活用していくための工事となりますので、ご理解とご協力をお願いします。

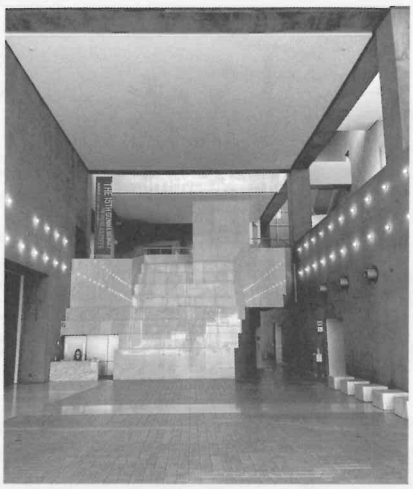
今回行う工事の概要は以下のとおりです。

1．空調設備更新工事

当館の建物は、1974年の開館時から使われている本館棟（展示室1、2、6、7、講堂、アトリエ、事務室など）、1991年に完成した新収蔵庫棟、1998年に増築された現代美術棟（展示室3、4、5）に大きく分かれています。今回はこのうち、本館棟の空調設備を更新する工事になります。

美術館の展示室や収蔵庫では、作品を保護するため、温度、湿度を厳密にコントロールしなければなりません。部屋ごとに設置される空気調和機（略して空調機）が冷水と温水、そして蒸気を使って適切な温湿度の空気を作り、室内に送り込んでいます。

今回は、それらの空調機に冷温水を供給するおおもととなる熱源機器と、蒸気を作り出す加湿器の更新が最大の目的となります。熱源機器は、開館以来使用されてきた灯油を燃料とした吸収式冷温水発生器から、電気式の空冷ヒートポンプチラーに更新されます。加湿方式も燃料を使ったセントラル方式の蒸気ボイラーから、空調機ごとの電極式加湿器へと更新されます。



工事対象となるホールの天井

2．特定天井改修工事

建物では一般的に、コンクリートや木材などでできた躯体の内側に、天井や壁の内装材が取り付けてあります。天井材が金具などで躯体から吊られている天井、いわゆる吊り天井については、東日本大震災の際の落下事故を受けて法律が改正され、面積や高さなどが一定の基準を超えるもの（特定天井）については補強や改修を行うことになりました。当館では、ホールおよび中央階段、そして展示室3の天井がこれに該当します。直ちに危険があるわけではありませんが、大規模地震が発生した際に来館者の安全を確保するため、できるだけ早く対策を取る必要があります。

今回は空調設備更新工事にあわせて、まずホールおよび中央階段の天井を改修することになりました。床から、高いところで13mを超える高さにまで全面に足場を組んで天井を張り替える、大規模な工事になります。

なお、新収蔵庫棟と現代美術棟の空調設備、展示室3の特定天井についても、2023年以降、計画的に工事を行っていく予定となっています。

Workshop

「デミタスカップの愉しみ」展 ワークショップ

大きなデミタスカップ（？）に描こう！レポート

このワークショップは「デミタスカップの愉しみ」展にあわせて、展示作品の小さなデミタスカップを逆手にとり、巨大デミタス（？）カップ（高さ40×直径35㎝）＆ソーサー（直径80㎝）に絵付け、装飾をしてもらおう、というものでした。21名10チームの参加により、4月17日の説明会でカップ＆ソーサーを渡し、4月18日～5月1日の期間に自宅や美術館アトリエで制作してもらいました。大きすぎて完成できないのでは、あるいは、制作期間が短かすぎないか、との美術館の心配をよそに、5月1日までに続々と完成、搬入される、まさに十人十色の傑作カップたちには驚かされるばかり。5月2日から（コロナウイルス感染症拡大防止の休館をはさんで）6月27日まで、ホールとギャラリーで来館した方の目を楽しませてくれました。

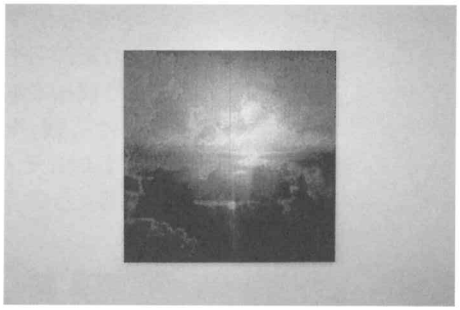
群馬青年ビエンナーレ2021入賞作品

THE 15TH GUNMA BIENNALE

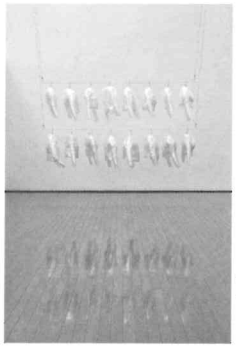
第15回となる今回は、318組（321名）から459点の応募があり、そのうち50名による50点が入選しました。入賞審査の結果、大賞1点、優秀賞1点、奨励賞5点、ガトーフェスタハラダ賞1点の計8点が入賞となりました。

大賞を受賞した山本千愛（やまもとちあき）氏の《次にくる日のための－（One for coming days）》は、2019年から2020年にかけて12フィート（約3.6 m）の木材を持って群馬から福岡をめざして徒歩で移動した道中の記録を、持ち歩いた木材、映像、テクストで再構成したインスタレーション作品です。

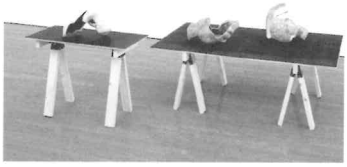
［大　賞］
山本千愛《次にくる日のための－（One for coming days）》



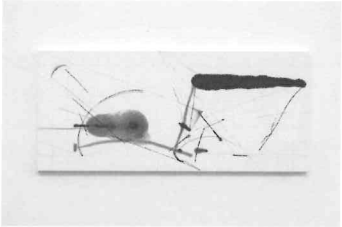
［優秀賞］
香月恵介《Lux #9》



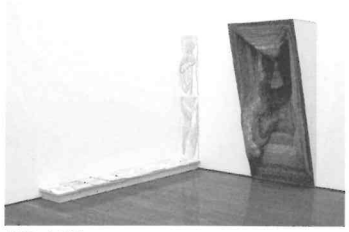
［奨励賞］
川本早花
《美しいあなたになりたい》



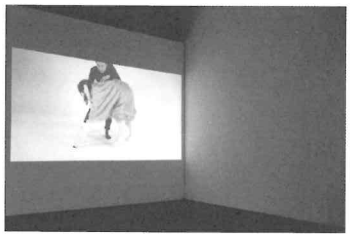
［奨励賞］
木田陽子《無痛》



［奨励賞］
下村奈那《10cmを1秒とする（178-42-14）》



［奨励賞］
谷口智美《地面からとおい場所》



［奨励賞］　中谷優希《scapegoat》

［ガトーフェスタハラダ賞］
水戸部春菜《We without words》

友の会だより

Museum :. Shop

ショップの商品棚の端のスペースに「エンド」という名前がついていることをご存じでしょうか？ お客様に自然と目を向けていただける場所でもあり、お店のイチオシ商品や季節商品など、アピールしたい商品をご提案する場でもあります。

当ミュージアム・ショップでは、当館オリジナルグッズや展示内容に関連したアーティストグッズをまとめてみたり、ご家族が一緒にアートに触れられるようにアート入門絵本を特集してみたりと、展示を見た後のお買い物が楽しくなるような商品をご紹介しています。

ご来館の際には、ぜひご覧いただきショッピングをお楽しみください。

ムンクの版画展示に合わせたグッズを並べた「エンド」（2021年5月）

［お問い合わせ先］　群馬県立近代美術館 友の会　Tel.027-346-5560（館代表）/ Fax.027-346-4064

作品ひとつ　定松晶子

1952年に渡仏し、55年にミッシェル・タピエと知り合いアンフォルメル運動に加わった今井俊満は、暗い画面に赤や黒、黄の絵具を垂らし、飛び散らせた「熱い」抽象絵画を制作した。自分のアンフォルメル作品が制作された時期を、後に今井本人が 54年から61年頃までと限定していることから、63年に制作された本作は、そこには属さない作品だ。絵具の飛沫や滲みを見せる激しい表現にアンフォルメルの痕跡を残してはいるものの、この作品が何よりも強烈に発しているのは、その「日本らしさ」だろう。日の丸のような赤い円、書のような黒い筆線、朱と黒の形が金地の上に間を置いて配され、襖絵や屏風を思わせる。

ヨーロッパの文化を吸収しようと渡ったフランスで、タピエとその周りの人々に日本美術の素晴らしさを逆に教えられた今井は、相変わらず西洋の模倣を続ける日本の美術界に対して、「日本美術の独立に挑戦」しようと思い立ち、やがて「極度にナショナルなものこそが、極度にインターナショナルなものになりうる」という信念を持つに至る。この作品はその過程で、アンフォルメルの手法と日本の伝統美を融合させる試みと捉えることができる。左上と右下に位置する赤と黒の塊は、偶然にできた不定形のようでありながら、 62～63年に制作された他の《東方の光》と、形、配置ともに相似していることから、この画面構成が考え抜かれて組み立てられ、当時の今井にとって重要な意味をもっていたことを示している。

この作品は展示室 3の「現代の美術Ⅱ」で、11月 7日まで展示される。

今井俊満（1928-2002）
《東方の光》
1963年 油彩・カンヴァス
194.5×259.5㎝

コレクション展示
Collection

[展示室 2・6]

■日本と西洋の近代美術Ⅲ
9/11～11/7

当館の収蔵品より、印象派から 20世紀前半の西洋近代絵画ならびに彫刻、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画を展示します。

ピエール=オーギュスト・ルノワール
《読書するふたり》

[展示室 3]

■現代の美術Ⅱ　9/11～11/7

多彩な表現による 20世紀後半以降の美術を紹介します。

[展示室 5]

■揺れる光／拡散する色彩
9/11～11/7

オノサト・トシノブは規則的な色面で画面を分割し、李禹煥は単色の蛍光塗料により空間を変質させます。加藤アキラや保田春彦、清水九兵衛は金属による光の反射を巧みに操り、鈴木ヒラクは光の軌跡をドローイングの線でとらえます。鬼頭健吾のインスタレーションは、まさに色彩と光そのものを見せるための装置と言えるでしょう。

鬼頭健吾《active galaxy》
寄託作品
［撮影：木暮伸也］

[展示室 4]

■鶴岡政男　ドローイングと立体　9/11～10/10

鶴岡政男は形をとらえるスタイルを絶えず変化させながら、日本の戦後洋画史上、独特の視点で社会問題や人間の本質を諷刺し続けました。今回はドローイングと立体にあらわれた鶴岡の飄逸な表現をご紹介します。

■エッチングの現在　10/12～11/7

イメージを複製する手段として登場した銅版画ですが、技法の発展により多彩な表現が可能となり、現代まで数多くの作家がそれぞれ独自の表現を生み出してきました。この展示では、銅板を腐蝕させて版を作る「エッチング」に焦点をあて、その表現の可能性を拡張させているジュリアン・シュナーベル、山口啓介、村上早の作品を紹介します。

ジュリアン・シュナーベル
『トッド、ケージ・ウィズアウト・バーズ』Ⅲ

[展示室 7] 山種記念館

■南画の系譜Ⅰ　9/11～10/10
■南画の系譜Ⅱ　10/12～11/7

企画展示「関東南画のゆくえ　江戸と上毛を彩る画人たち」に関連して、「南画の系譜Ⅰ」では近世の関西と関東の南画を、「南画の系譜Ⅱ」では近世末期から近代にかけての南画を当館所蔵品および寄託作品よりご紹介します。中国絵画に大きな影響を受けながら、西洋絵画や日本の伝統的な絵画様式も取り入れて展開した南画の魅力を、地域や時代をたどりながらお楽しみください。

小室翠雲《山水図屏風》

群馬の森
美術館ニュース

群馬県立近代美術館
THE MUSEUM OF MODERN ART, GUNMA
〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町992-1 群馬の森公園内
TEL 027-346-5560　FAX 027-346-4064
http://mmag.pref.gunma.jp/

デザイン：寺澤事務所・工房
印　　刷：上毎印刷工業株式会社